取り立て副詞“就”の音調と意味

李　智麗

はじめに

取り立て機能を持つ副詞“就”によって取り立てられる要素は語の並びだけからは確定することができない。コンテキストが不明で音調の情報がない場合、“就”を含む文の意味は曖昧である。従来の研究では、重音（アクセント）が副詞“就”の意味解釈とどう関係するかに注目したものが多い。（重音が付加される意味的な単位を重音句と呼び、以下では下線を引いて示す。）例えば：

(1) a. 他就重音句要了三张重音句票。
　　彼は三枚の切符しか取らなかった。
　b. 他重音句就要了三张票。
　　彼だけで切符を三枚も取った。
　c. 他一个人重音句就要了三张票。
　　彼一人だけで切符を三枚も取った。　　呂叔湘（2003）[1],pp.212

上記用例（1a）では、重音が副詞“就”と数量詞“三张”の両方に置かれ、（1a）は「三枚しか取らなかった」の意味解釈になり、一方、（1b）が示すように、重音を“就”の前の語句“他”に付加すれば、（1b）は「彼だけで」という意味に解釈される。これまでの先行研究では、重音の位置が“就”の意味解釈に関わっていることに注目してきた。しかし、例（1a）における“就”と“三张”の両方に付加される重音はそのレベルが違う。本稿は特に、従来の研究の中ではあまり扱われてこなかった重音のレベルに着目し、“就”の意味との関係を明らかにする。

さらに、（1b）について、呂叔湘（2003）は「“就”は軽く読む」と指摘しているが、“就”だけが軽く読まれるのではない。本稿では“就”の後にポーズがなければ、重音より右側の要素“就要了三张票”も通常の発音より短くかつ弱く発音されることを指摘する。また、重音が“一个人”（例1c）に付加されても、“他”（例1b）に付加されても、文の意味には変わりがない。重音は“就”を含む文の意味解釈に重要であるが、重音が付加されていない部分にも特徴的な音声がある。本稿では以上の事実に基づき、どの部分が弱いのか、ということも“就”を含む文の意味に重要な役割を果たしていると主張する。その際、「取り立てスコープ」、「弱化」及び「韻律フレーズ」という概念を導入し、意味解釈の仕組みを分析する。

先行研究

副詞“就”が含まれる文に「曖昧性」が生じること、及び重音がこの曖昧性を解消するのに有効な方法であることを多くの学者は指摘している。“就”はその後の数量詞を取り立てる場合、“就”だけ

に重音が付加される説（『现代汉语八百词』[1]）と“就”のみならず、その後の数量詞にも重音が置かれるという見方（孟凡鈴（2008））に分かれている。本稿は“就”にも重音が置かれるということを例示し、重音に提案されているさまざまな種類を整理する。

また、“就”はその前の数量詞を取り立てる場合、“就”を先行する数量詞に重音が付加され、“就”は「軽読」（軽く発音されるという意味）されると『现代汉语八百词』に書いてあるが、「軽読」とは一体どういう意味なのかに関する説明は十分とはいえない。本稿は重音が付加されていない部分にも特徴的な音声があることを指摘する。

副詞“就”の意味と音韻、特に「重音」との関係について詳細に述べている論文には徐以中・楊亦鳴（2010）、陳雅（2003）等が見られる。陳氏は初めて“就”に関わる「羅輯重音」（Logical stress 論理的強勢）[2]にはいくつかのレベルのものがあると指摘し、これまで“就”の意味と発音に関する研究を大きく発展させた。この研究を踏まえて、徐氏と楊氏は音声実験を行い、「重音」の音声特徴を掘り出し、陳氏の研究を発展させた。徐以中・楊亦鳴（2010）の研究によれば：（下付き文字は重音の種類、下線は重音の範囲を示す。）

(2) a. 我<u>就</u>$_{次重音}$去<u>他</u>$_{重音}$那儿。
私は（他の所に行かず）、彼の所だけに行く。

b. 我<u>就</u>$_{弱重音}$去他那儿。
私はすぐに彼の所に行く。

c. 我<u>就</u>$_{重音}$去他那儿。
私は意地でも彼の所に行く。

例（2a）では、副詞“就”は“仅仅”、“只”と置き換えることができ、目的地を“他那儿”（彼のところ）のみに限定する。この場合、焦点の“他”は重音が付加される場所であるが、“就”も強く読まれる。ただ、焦点の“他”より重音のレベルが弱く感じられる。陳氏はこれを「次重音」と呼んでいる。一方、例（2b）では、“就”は時間副詞で、「すぐに」という意味を表し、“就”が単独で焦点の働きをする。例（2c）では、“就”は断固とした「意地でも」という強い語気を表すため、例（2b）の“就”より強く発音される。例（2b）の“就”は比較して弱く発音されるため、「弱重音」と呼んでいる。しかし、徐氏と楊氏の研究では、範囲副詞“就”には「範囲を限定」の“就”と「少量を強調する」の“就”に分けられ、それぞれの「羅輯重音」が異なることについては言及していない。

研究目的と本稿の構成

副詞“就”が含まれる文に「曖昧性」が生じるのは“就”が取り立て詞で、取り立てスコープの位置により、文の意味が異なってくるからだ。「重音」、「弱化」が文の意味決定に深く関わっている。本稿は“就”を含む一見曖昧な文が、実際の発話の中でスコープの特定をある程度可能にする特徴をもつことを音響的な面から明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第一章で、現代中国語の副詞“就”の用法と意味を扱った先行研究を検討し、範囲を限定する“就”は「範囲限定」、「少量強調」の二つのパターンに分かれることを提案し、新たな分析を試みることにする。また、取り立てスコープという概念を取り入れ、この二つのパターンの“就”の相違を考察する。第二章では、“就”が含まれる同音異義文において、重音の位置、レベルが文の意味決定にどう関係しているかの解釈を試みる。さらに、第三章では、

「弱化」及び「韻律フレーズ」という概念を導入し、“就”を含む文の音声的特徴から、語意の限定・区別を試みる。

1. “就”の意味と取り立てスコープ

1-1. “就”の意味と分類

現代中国語の“就”は極めて使用頻度が高く、重要な単語の一つである。“就”は主に副詞として用いられるが、その他に、接続詞、動詞の機能も存在する。本稿は“就”の発音と緊密な関係を有している“就”の副詞の用法に焦点をあてる。現代中国語の副詞“就”に関する研究は数多くある。代表的なものとしては、陳雅（2003）、 徐以中・楊亦鳴（2010）などがあり、それらをまとめると、以下のようになる。

陳雅（2003）は「试析副词“就”的语音形式及语义指向」という論文で、現代中国語の副詞の“就”を以下の例が示すように、時間の“就”、モダリティーの“就”と範囲の“就”の三つのパターンに分類している。

(3) a. 我就去北京。
私はすぐに北京に行く。
b. 我就去北京。
（私に北京に行かせないのなら、）私は意地でも北京に行く。
c. 我就去北京。
私は（他の都市に行かず）、北京だけに行く。

上記用例の (3a) における“就”は日本語の「すぐに」、「ただちに」に相当し、動作が短時間で発生することを表す。“就”の前に“很快”（まもなく）、“马上”（すぐ）という時間副詞、もしくは具体的な時間を表す語を置くこともできる。例えば、“就”の前に“三天”を置くと、「三日もしたら行く」という意味解釈になる。また、“就”は判断を強めるモダリティーを表すこともでき、例 (3b) の“就”は「北京に行く意志が確固としていて簡単に変わらないこと」を表す。以上の二つの用法の他、“就”は「範囲を限定する」働きもある。例 (c) が示すように、“去”（行く）という動作が目的語“北京”（北京）だけに適用され、目的語以外の場所には当てはまらないことを表す。

範囲副詞の“就”について、さらに、呂叔湘（2003）は次のように定義している：「“就”は範囲を確定し、日本語の「単に、ただ、～だけ」にあたり、名詞、動詞の前に置かれる」。しかし、以下の例文では、範囲副詞の“就”は名詞の前だけではなく、名詞の後に置くこともでき、“就”と名詞の相対的位置によって、文の意味が異なってくる。以下の例文を参照されたい。

(4) a. 就小李一个人喝了一瓶酒。
李さんだけ一本のお酒を飲んだ。
b. 小李一个人就喝了一瓶酒。
李さん一人だけで一本のお酒を飲んだ。

上記例文 (4a) では、範囲副詞“就”は「李さん」を限定し、特に取り上げるのに用いられている。「一本のお酒を飲んだ人は他の人ではなく、李さんである」という意味を表している。しかし、例文 (4b) が示すように、“就”は名詞フレーズ“小李一个人”の後に置かれることもできる。この場合、

“就”は「一人だけで」という意味を表し、「人数が少ない」というニュアンスを含む。このように、範囲副詞の“就”には二通りの意味があり、“就”の意味解釈によって使い方も異なってくる。“就”は範囲を限定するという意味で使われる場合、数量詞の前に置かれるが、一方、“就”は数の少ないことを強調することができ、数量詞が動詞の前に置かれる場合、“就”は数量詞の後に置かなければならない。動詞の後に数量詞が来る場合、“就”は動詞の前、すなわち、数量詞の前に現れる。ただし、一つの文に二つの動詞が現れる時、数量詞は“就”を先行させることがある。本稿では、容認不可能な文、意味解釈ができないものに「＊」をつけることにする。例えば：

(5) a. 他喝了两杯就不喝了。

彼はビールを二杯飲んだだけでやめた。(二杯しか飲まなかった)

b.＊他喝了就两杯啤酒不喝了。

彼は二杯のビールを飲んだらやめた。　(二杯しか飲まなかった)

上記用例 (5a) では、“就”は二つの事柄が相接して発生することを表し、“就”の前には必ず動詞句を用いる。この場合、“两杯”は前の動詞の直後、“就”の前に置かれ、例 (5b) が示すように、動詞と“两杯”の間に“就”が置かれることはない。動詞の後に数量詞が来る場合、“就”は数量詞に先行させることが多いが、上に見たように動詞句が二つ続く場合、“就”は数量詞の後に置くこともある。

前述したように、“就”はその数量が話者の期待、予想した量に達しなかったので、少ない、足りないという意味を表す。この場合、少量を表す数量詞を伴うか、あるいは数量詞を補っても意味が変わらない場合が多い。典型的には、数量詞が現れるが、例 (6) のように、数量詞“一”が省かれると見なせる場合も含む。

(6) a. 他做选择题就用了 40 分钟。

彼は選択肢問題をやるだけで 40 分かかった。

b. 去的人不少，我们班就去了七、八个。

行った人は多い。私たちのクラスだけで７～８人も行った。　呂叔湘 (2003),pp.212

上記の用例 (6a) における“选择题”(「選択肢問題」) は数量詞ではないが、穴埋め問題、翻訳問題などと同様、問題の一種であり、“选择题”(「選択肢問題」) は“一种问题”「一種の問題」に置き換えられることから、“选择题”は数量詞を伴わない名詞だが、ここでは、数量的に解釈することができる。同様に、例文 (6b)における“我们班”は学校の中のクラスという集合の中の一つであり、ここでは少量の意味を表す。

“就”には時間を表す言葉の後に用い、事柄が既に発生、存在していたことを強調する働きもある。以下の例を参照されたい。“就”は日本語の「…の時にもう」という意味を示し、“就”はその前の要素しか取り立てられない。

(7) a. 他就中学时代去了美国，大学时代没有去过。

彼は中学時代だけにアメリカに行った。大学時代にはアメリカに行ったことはない。

b. 他中学时代就去了美国。

彼は中学時代にもうアメリカに行った。

上記用例 (7a) における範囲副詞“就”は“只有”、“仅仅”に置き換えられ、その後の要素しか取

り立てられない。例 (7a) は「大学時代ではなく、中学時代だけに行った」という意味を表している。一方、例 (7b) における“就”はその前の要素を取り立てることができ、例 (7b) は「中学時代に早くも行った」という意味合いで、中学時代は話し手にとってとても早い時間というニュアンスが含まれている。“就”は時間が早いということを強調する場合、時間を表す言葉に先行してはいけない。

先行研究での単に“就”は範囲を限定するという見方は不十分と言える。本稿では、他の可能性を排除し、範囲を限定し取り上げるのに用いられる“就”を「範囲限定」の“就$_1$”と呼ぶ。人や事柄の範囲のみならず、動作行為、状態の範囲を限定することもできる。一方、数が少ない、数量化された名詞の少量、時間が早いことを強調する“就”を「少量強調」の“就$_2$”と呼ぶ。“就$_2$”を用いることにより、その数量が話者の期待、予想した量に達しなかった、もしくは話者の予想より難易度が低いという「少量」のニュアンスを表している。数量詞は動作量、時間量を表すものでよい。

本論文では、こうした研究を踏まえ、改めて現代中国語の副詞“就”について、従来の研究を概観した上で、副詞の“就”を以下の例 (8) のように、時間副詞、語気副詞、「範囲限定」と「少量強調」の四つのパターンに分類する。以下の例を参照されたい。

(8) a. 天很快就亮了。
　　夜はまもなく明ける。
　b. 我就不信我学不会。
　　私は自分が習得できないなんて絶対信じない。
　c. 我就要这个。
　　私はこれだけが欲しい：ほかのはいらない。
　d. 我就有一本，你别拿走。
　　私は一冊しか持っていないから、持って行かないでくれ。　　呂叔湘 (2003),pp.212

1-2. 取り立てスコープ

前述したように、「少量強調」の“就”は数量詞と共起する場合、その数量が話者の期待、予想した量に達しなかったので、少ない、足りないという意味を表している。ところが、香坂 (1986) が指摘するように、“就”は「比較して数が多い、回数が多い」という含みにかかわる場合がある。例えば以下の例 (9b) における含みを例 (9a) と比較されたい。

(9) a. 你们一个小组有五十个人，我们一个小组就十个人。
　　君達のグループは五十人もいるのに、私達のグループはたった十人しかいなかった。
　b. 你们两个小组一共才十个人，我们一个小组就十个人。
　　君達は二つのグループを合わせてやっと十人だが、私達のグループは一つで十人だ。
　　香坂 (1986),pp.428

上記用例 (9a) と (9b) のような対照的な用法について、今までの多くの研究で、“就”が「少ない」と「多い」という正反対の意味を同時に持っていると考えられてきた。しかし、取り立てのスコープ (沼田 1995) の概念を援用すれば、副詞“就”自体は「少ない」という意味しかもたないと分析することが可能である。“就”を含む文に「多い」という含みが現れるとされてきたが、その“就”は文中の他の要素（スコープ）を取り立てる機能をもつ取り立て詞であって、スコープ部分の数量や範囲

を限定していると考えることができるのである。取り立て副詞“就”は数量や動作などの範囲を限定し、上記用例(9a)では、「少ない」と限定されているものはその後の「十人」である。一方、取り立て副詞“就”はその前の“一个小组”「一つのグループ」を取り立てることもでき、例(9b)は「グループは一つだけで十人(も)いる」という意味解釈になる。

本稿は取り立て詞のスコープという視点から“就”に関する考察を試みたい。取り立て詞のスコープという概念について、沼田(1995)では、次のように定義している。

> 取り立て詞は、すべて取り立てのスコープを持っている。取り立てのスコープとは、取り立て詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該取り立て詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲である。取り立てのスコープは、取り立て詞の分布及び文脈等の情報による、統語論的側面と語用論的側面の両方から規定されるものである。

副詞の“就”の四つのパターンは取り立て詞の働きをしているのかを以下の例から考察する。

(10)　你先走，我就来。
　　あなた先に行って下さい，私もすぐに行きます。　香坂(1988),pp.147

(11)　你不让我干，我就要干。
　　君がさせてくれようとしなくても私はやる。　呂叔湘(2003),pp.212

(12) a. 我就会说法语，不会写。
　　私はフランス語を喋れるだけで、書けない。
　　b. 我就会说法语，不会说英语。
　　私はフランス語だけを喋れる。英語は喋れない。　同上

(13) a. 他就要了三张票，没多要。
　　彼は切符を3枚とっただけで、多くは求めなかった。
　　b. 他就要了三张票，没剩几张了。
　　彼だけで切符を3枚もとったので、もう何枚も残っていない。　同上

上記用例(10)における“就”は「間をおかずに動作を行う」という意味を表し、動詞を修飾しているが、取り立てているのではない。同様に、例(11)の“就”は決然とした語気を表すため、取り立て詞とは認めない。一方、例(12a)、(12b)が示すように、「範囲限定」の“就”はその後の動詞“说”のみならず、目的語の“法语”も取り立てることができる。また、例(13a)、(13b)では、「少量強調」の“就”はその後の目的語“三张票”はもちろん、その前の主語“他”も取り立てることができる。

以上をまとめると、副詞の“就”には主に四つの用法があり、すべての“就”が取り立て副詞の“就”というわけではない。「範囲限定」の“就”と「少量強調」の“就”は取り立て副詞で、副詞“就”自体が独立的に焦点を働くわけではなく、意味的には繋がりがある成分(取り立てスコープ)とともに焦点の働きをする。取り立て機能をもつ“就”は意味解釈と音声特徴と緊密な関係を有しているため、本稿は取り立て機能を有している“就”に注目し、「範囲限定」の“就”と「少量強調」

の“就”をそれぞれ“就$_1$”と“就$_2$”と呼び、両者に焦点を合わせる。

本稿では、“就”との相対位置から、“就”の取り立てスコープを「前方スコープ」、「後方スコープ」の二つのパターンに分類する。“就$_1$”はその後の要素しか取り立てられない。それに対して、“就$_2$”はその前後の数量詞両方とも取り立てられる。前文に挙げた例 (9) をもう一度見てみる。本稿では、取り立てスコープは [ ] に入れて示す。

(14) a. 你们两个小组一共才十个人，我们 [一个小组] 就十个人。 「前方スコープ」
君達は二つのグループを合わせてやっと十人だが、僕達のグループは一つで十人だ。
b. 你们一个小组有五十个人，我们一个小组就 [十个人] 。 「後方スコープ」
君達のグループは五十人もいるのに、私達のグループはただ十人しかいなかった。
香坂 (1986),pp.428

例 (14a) では、“就$_2$”はその前の数量詞“一个小组”を取り立てることができ、取り立てスコープ“一个小组”は“就$_2$”の前にあるため、「前方スコープ」となる。一方、例 (14b) が示すように、“就$_2$”はその後の要素も取り立てることもできる。“就$_2$”の取り立てスコープ“十个人”は“就$_2$”の後にあるため、「後方スコープ」となる。コンテキストが不明な場合、“就$_2$”の取り立てる要素は「前方スコープ」なのか、「後方スコープ」なのか、書き言葉では非常に判断し難いが、実際の会話の中で、重音、ポーズなどといった音韻的要素が“就$_2$”の意味確定に重要な役割を果てしている。詳細については次節に譲る。

1-3.“就$_1$”の取り立てスコープ

a.“就$_1$”は「後方スコープ」しか取れない

“就$_1$”は取り立て詞“也”と異なり、“就$_1$”の後の要素しか取り立てられない。“就$_1$”の直後にスコープがくる。“就$_1$”とスコープの間にスコープでない単語が入らない。以下の例を参照されたい。

(15) a. 星期一就小李去游泳。
李さんだけが月曜日に水泳に行く。
b.*就星期一小李去游泳。

(16) a. 小李就星期一去游泳。
李さんは月曜日だけ水泳に行く。
b.*就小李星期一去游泳。

上記の例 (15b) では、時間副詞“星期一”はスコープではないため、“就$_1$”の直後に来ることはできない。例 (16b) においては、“星期一”は“就$_1$”の取り立てスコープで、主語“小李”がスコープに含まれていないため、“就$_1$”の後に置かれない。主語、時間、場所を表す語などのような動詞の前にくる要素は“就$_1$”の取り立てスコープになる場合、“就$_1$”の直後に置かなければならない。“就$_1$”は必ず動詞の前に固定されているが、動詞の直前という位置とは限らない。“就$_1$”はその直後の要素しか取り立てられない。

(17) a. 明天我们就去游泳，不去温泉。
明日私達は水泳に行くで、温泉に行かない。

b.*明天就我们去游泳，不去温泉。

c.*我们就明天去游泳，不去温泉。

上記の例 (17b) においては、主語“我们”がスコープでなければ“就$_1$”の前でなければならない。同様に、比較的語順が自由である時間副詞“明天”も同様で、スコープに入らなければ、“就$_1$”の後に来ることができない。“就$_1$”の直後にある要素が取り立てスコープになる。“就$_1$”とスコープの間にスコープでない単語は入らない。ただし、動詞の後に位置する目的語が“就$_1$”の取り立てスコープになる場合、“就$_1$”は動詞の後、目的語の直前に来ることはできないので、目的語または動詞の後に位置する補語を取り立てる場合、“就$_1$”は動詞の前に置かれる。以下の例を参照されたい：

(18) a. 小李就去北京，不去上海。

李さんは北京だけに行き、上海には行かない。

b. 我就隐隐约约看得见，但看不清楚。

ぼんやり見えるだけで、はっきり見えない。

上記用例 (18b) では、“就$_1$”の直後に“隐隐约约看得见”がある。(18a)、(18b) における“就$_1$”の取り立てスコープはそれぞれ目的語の“北京”と補語の“隐隐约约看得见”で、“就$_1$”の直後に来ることができない。それは“就$_1$”は副詞で、必ず動詞の前に置かれるという制限を課せられているからだと考えられる。

また、一つの文に二つの動詞が存在する場合、あるいは、“把”、“给”、“比”等のような動詞に類似する役割を果たす介詞がある場合、“就$_1$”は先行する動詞の直前に移動する。そのため取り立てスコープは文脈により直後であったり、さらに後方であったりする。以下の例を参照されたい。

(19) a. 我就去北京开会，不去上海。

私は北京だけに行って、会議参加する。上海に行かない。

b. 我就去北京开会，不是去旅游的。

私は会議参加するためだけに北京に行く。旅行に行くわけではない。

b.“就$_1$”の取り立てスコープの特徴

コンテキストが不明な場合は、書き言葉では、“就$_1$”の取り立てる文の要素がどれなのかを確定することができない。以下のような“就$_1$”が含まれる文はいくつかの意味に解釈できる。

(20) a. 我就 [参加过] 这个比赛。(不是这个比赛的裁判)

私はこの試合に参加しただけで、(この試合の審判員ではない。)

b. 我就参加过 [这个] 比赛。(不是昨天的那个比赛。)

私はこの試合だけに参加したことがある。(昨日のあの試合ではなかった。)

c. 我就 [参加过这个比赛]。(其他比赛的事情都不知道。)

私はこの試合に参加しただけで、(他の試合の事は全く分からない。)

上記用例 (20) の下線部で示したように、“就$_1$”を用いた文が書き言葉であり、コンテキストが不明な場合、書面上、いくつかの意味に解釈される。“就$_1$”が文中のどの箇所を取り立てているかは、統語的には明らかではないが、“就$_1$”はその後の動詞、目的語、「動詞＋目的語」のいずれかを取り立てることができる。前述したように、副詞“就$_1$”は「後方スコープ」しか容認できないため、主

語が“就$_1$”の取り立てスコープになる場合、“就$_1$”を主語の前に前置させることが必要である。以下の例を参照されたい。

(21) a. 就［我］参加过这个比赛，我们班的其他人都没有参加过这个比赛。
私だけがこの試合に参加したことがある。我々のクラスの他の人達はみんなこの試合に参加したことはない。

*b. 就我［参加过］这个比赛，不是当这个比赛的裁判。
私はこの試合に参加しただけで、この試合の審判員ではない。

*c. ［就］我参加过这个比赛，没有参加其他比赛。
私はこの試合にだけ参加したことがある。他の試合に参加したことはない。

*d. 就我参加过［这个比赛］，不是昨天的那个比赛。
私はこの試合だけに参加したことがある。昨日のあの試合ではなかった。

*e. 就我［参加过这个比赛］，其他比赛的事情都不知道。
私はこの試合に参加しただけで、他の試合の事は全く分からない。

上記用例(21a)から、“就”は範囲を限定する場合、取り立てスコープは“就$_1$”に先行させてはいけないことが分かる。例(21)のa、b、c、d、eが示すように、主語が取り立てスコープではない場合、主語は“就$_1$”の後に来ることはできない。しかし、取り立てスコープが主語、主語を含むフレーズ、主語を含む文の場合は主語を“就$_1$”の後に移動する必要がある。例えば：

f. 就［我参加过］这个比赛，我们班的其他人都没有听说过这个比赛。
この試合は私が参加しただけで、クラスの他の人達は皆この試合のことを知らなかった。

g. 就［我参加过这个比赛］，我们班的其他人都对体育活动不敢兴趣。
私がこの試合に参加しただけで、クラスの他の人達は皆スポーツに興味を持たない。

以上用例(22f)、(22g)における“就$_1$”の取り立てスコープは主語“我”を含む動詞フレーズ、動詞文の場合、主語を“就$_1$”に後置させる必要がある。

1-4.“就$_2$”の取り立てスコープ

“就$_2$”は「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方が可能である。「前方スコープ」の場合、“就$_2$”の取り立てスコープはその直前の要素とは限らない。

(22) a. 我们两个人用三个小时才完成这项工作。
［他一个人］用三个小时就完成了这项工作。 「前方スコープ」
私達は二人で三時間も掛けてこの仕事を完成させたが、彼は一人だけで三時間をかけてこの仕事を完成させた。

b. 我用十个小时才完成这项工作。
他一个人［用三个小时］就完成了这项工作。 「前方スコープ」
私は十時間も掛けてこの仕事を完成させたが、彼は一人だけで三時間だけでこの仕事を完成させた。

上記用例(22a)では、“就$_2$”の取り立てスコープは主語“他一个人”で、“就$_2$”の直前の要素ではない。例(22b)では、取り立てスコープ“用三个小时”は“就$_2$”の直前の位置でもよいが、“就$_2$”を“用三个小时”に先行させることもでき、文の意味に変わりがない。

「少量強調」の“就$_2$”はその後の要素を取り立てる場合、目的語の後に続くものがない限り、“就$_2$”は動詞の前に置かれる。例えば：

(23) a. 老赵就学过一门外语。
　　趙さんは一つの外国語しか学んだことがない。
　*b. 老赵学过一门外语就。
　c. 老赵学过一门外语就不学了。
　　趙さんは一つの外国語を学んだだけでやめた。

上記用例 (23a) では、“就$_2$”は動詞の後の目的語を取り立てているが、例 (23c) が示すように、目的語の後に続くものがない限り、“就$_2$”が目的語の後に来ることはできない。

取り立てスコープが“就”の後に来る場合、「少量強調」の“就$_2$”と「範囲限定」の“就$_1$”は同じ語順になる。以下の例を参照されたい。

(24) A：老赵学过好几门外语吧？
　　趙さんは複数の外国語を学んだでしょう。
　B：老赵就学过一门外语。
　　趙さんは一つの外国語しか学んだことがない。（学んだ外国語が少ない。）

(25) A：老赵学过法语和英语吧？
　　趙さんはフランス語と英語の両方を学んだでしょう。
　B：老赵就学过一门外语。
　　趙さんは一つの外国語だけを学んだことがある。

上記用例 (24) と例 (25) はコンテキストが不明な場合、語順だけでは、“就”がどちらの意味なのかを確定することはできないことを示している。実際の会話の中で、重音の置き方等の音韻的要素がこのような文の同音の意味解釈に重要な役割を果たしている。

2. 取り立てスコープと「重音」との関係

取り立てスコープの位置により、“就”を含む文の意味解釈が異なってくる。“就”が文中のどの要素を取り立てているのかはコンテキスト、語順、音韻等様々な要素が関与している。特に、“就”の意味解釈は「重音」と緊密な関係をなしている。

2-1. 重音の分類と先行研究

アクセント（中国語の“重音”）は学者の捉え方により、全く違うものを指す場合がある。端木三 (1999) が“普通话里的轻声字都没有重音，其他字都有重音”（「標準語の軽声字にはアクセントが置かれない。それ以外の字には全部アクセントがある」）という場合の「アクセント」は語アクセント（中国語の“词重音”）のことである。語アクセントは語によって決定され、フレーズが文中での位置に関係ない。複数の音節（２音節或いは、それより多い音節数）を持つ語では、軽声以外の音節にはすべて重音がある。赵元任 (1968) によれば、語アクセントは３つのレベルに分けるのが一番理想的で、即ち、一般的には、最後の音節が一番強く、最初の音節が二番目に強く、真ん中の音節が最も軽い。一番強い音節の前に３をつけて、二番目に強い音節の前に２を入れる。最も軽く発音される音

節の前に１をつけて示すと：

２注３意　　２山１海３关　２东１西１南３北

語アクセントとは異なるプロミネンスこのことは中国語学界では“语句重音”（文アクセント）と呼ばれている。『中国语言学大辞典』によると、文アクセントに文法的なものと情報構造上のものがあり、それぞれ文法アクセント“语法重音”と論理アクセント“逻辑重音”と呼び、さらに、感情を強める文アクセントもあり、感情アクセント“感情重音”と呼ぶ、としている。文法アクセントの位置は統語構造によって自動的に決まるものであるのに対し、論理アクセントの位置はフォーカスの位置に関係する。

文法アクセントは統語構造によって常に定められた位置に出現するアクセントで、単語単位で定義されるものである。それに対して、論理アクセントはいわゆるフォーカスが生む強調アクセントで、単語単位、場合によって、単語の一部に掛かるものである。軽声に論理アクセントは来ない。感情アクセントは文法アクセント、論理アクセントと違い、文全体に関わることが多い。

楊立明（2002）は「中立発話の場合、文法アクセントの「優先順位」と「強さレベル」は文法構造によって決まる。主語、間接目的語、直接目的語の順で、「優先順位」と「強さレベル」はあがっていく。」と指摘している。文法アクセントは文法構造によってアクセントのレベルが異なるが、論理アクセントは文法アクセントで予想されるよりも強くて、長い重音である。また、論理アクセントは典型的には対比フォーカスの位置に現れる重音であるが、本稿で扱うアクセントは“就”の取り立てスコープの位置によって決定されるものであるため、論理アクセントに属すと考えられる。

従来の先行研究では、アクセントの位置が“就”を含む同音異義文の意味解釈に決定的な役割を果たしていると指摘されてきた。副詞“就”の意味と音韻的要素の関係、特にアクセントとの関係について詳細に述べている論文には徐以中・楊亦鳴（2010）、陳雅（2003）等が見られる。陳雅（2003）は初めて“就”に関わる論理アクセントにはいくつかのレベルのものがあると指摘し、これまで“就”の意味と発音に関する研究を大きく発展させた。すなわち、陳雅（2003）（2003）では、「“就”的读音并不仅仅简单地分为重读或轻读，而是根据“就”在句子中的地位分为四个梯度等级。分别是主重音、次重音、弱重音和轻音。」（“就”の発音はアクセントと「軽読」（軽く読まれる）の二つに簡単に分けてはいけない。“就”の文中での役割によって四つのレベルのものに分類すべきである。それぞれは主アクセント、副アクセント、弱アクセントと「軽音」である。）と指摘している。そして、陳雅（2003）では以下の例が挙げられている：（下線部はアクセントの範囲を示す。）

(27) a. 我<u>就</u>重音去他那儿。
　　私は意地でも彼の所に行く。
　b. 我<u>就</u>弱重音去他那儿。
　　私はすぐに彼の所に行く。
　c. 我<u>就</u>次重音去<u>他</u>重音那儿。
　　私は（他の所に行かず）、彼の所だけに行く。

上記用例（27a）では、“就”は断固とした「意地でも」という強い語気を表すため、判断を強める語気を表す“就”に付加するアクセントのレベルが一番強く、主アクセントと呼ばれる。一方、例（27b）では、“就”は時間副詞で、「すぐに」という意味を表し、語気副詞の“就”と範囲を限定する

副詞の“就”に比べて、アクセントのレベルは弱く、弱アクセントと名づける。例(27c)では、副詞“就”は“仅仅”、“只”と置き換えられ、“他那儿”という範囲を限定する。範囲を限定する意味を表す“就”は単独で焦点を表すのではなく、文の他の要素とセットになって焦点を示すため、“就”に次アクセント、“就”とセットで焦点を表す要素“他”(彼)にアクセントがかかる。“就”に掛かるアクセントは焦点の“他”のアクセントよりレベルが弱く感じられるため、陳氏はこれを次アクセントと呼んでいる。

例(27c)については、徐以中・楊亦鳴(2010)では、陳雅(2003)と全く違う意見を指摘した。Praatというソフトを用いた音声実験を行い、音強、母音の長さ、音節の長さの三つの面から“就”とスコープの“他”の発音を考察した結果、「“就”无论在音强、元音时长、音节时长上都大于“他”」(“就”の音強は“他”より強く、母音の長さ、音節の長さのどちらかも“就”は“他”より長い。)本稿は徐以中・楊亦鳴(2010)の意見に賛成する。“就”は範囲を限定するという意味を表す場合、“就”と取り立てスコープの両方にアクセントがかかるが、“就”のアクセントのレベルはより強い。

しかし、前述したように、“就”には「範囲限定」の“就$_1$”、「少量強調」の“就$_2$”もある。“就”の意味解釈によって、発音も異なる。これについては、陳雅(2003)と徐以中・楊亦鳴(2010)の研究では言及していない。本稿はこの二つの“就”の発音の区別に注目し、意味解釈と発音の関係を明らかにする。

2-2.“就”の意味解釈と重音の関係

“就”の意味はアクセントと緊密な関係を有している。“就”には動詞、接続詞、副詞などの用法があり、使い方は極めて複雑である。副詞の“就”はさらに、語気副詞、時間副詞等「範囲限定」と「少量強調」の働きが存在している。本稿は今までの先行研究で言及していない「範囲限定」と「少量強調」の“就”に焦点をあてる。以下の例を参照されたい。

(28) A:你把桌子上的东西都$_{重音}$吃了吗？
　　テーブルの上の食べ物をすべて食べたの？
　　B:没有，我就$_{主重音}$吃了一个面包$_{副重音}$。
　　いいえ、私は一個のパンだけを食べた。それ以外は食べなかった。

(29) A:你吃饱了吗？
　　お腹いっぱいになった？
　　B:我就$_{副重音}$吃了一个$_{主重音}$面包，怎么会饱。
　　私はパンを一つしか食べなかった。お腹いっぱいになるはずがない。

上記用例(28)と(29)における“就”はどちらもその後の要素を取り立てているが、それぞれの“就”の意味は異なり、重音のレベルも一様ではない。例(28)は「他の食べ物ではなく、一個のパンだけを食べた」という客観的な事実を述べるのに対し、例(29)は「食べた量は少なかった」というニュアンスが含まれる例である。例(28)では、重音は“就”と“面包”(パン)両方に置かれているが、“就”に置かれる重音がより強い。“就”の重音は“面包”の重音より弱ければ、文は不自然に聞こえる。一方、例(29)では、重音は“就”と数量詞“一个”両方に置かれるが、数量詞“一个”に置かれる重音は“就”の重音より強い。このように、範囲副詞の“就”には二通りの意味があり、意味解釈によって“就”の使い方も異なり、重音の置き方も一様ではない。

副詞“就”（語気副詞の“就”を除く）が焦点の働きを実現する手段は以下の二つに分けられる。1、副詞“就”自体が焦点として働く。この場合、副詞“就”に「重音」が付加される。他の取り立てられる要素がない。2、副詞“就”自体が単独で焦点として働くわけではなく、意味的繋がりがある成分とともに焦点の働きをする。Chih-hsiang Shu (2011) は“就”の取り立て用法を Focus-sensitivity と呼び、副詞は必ず焦点成分と共起すると指摘している。この分析にしたがって、2のような“就”を取り立て副詞と呼んで、“就”の意味解釈と音調との関係を分析している。

副詞“就”と意味的繋がりがある成分（取り立てスコープ）とに、ともに「重音」が付加され、二つの重音は必ずセットとなって現れる。“就”の表す意味によって、重音のレベルにも違いが見られる。“就”が「範囲限定」の意味を表す場合は、取り立てスコープより強く読まれなければならない。本稿はこのような“就”に付加されるより強い重音を「主重音」と呼び、スコープに置かれるやや弱く読まれる重音を「副重音」と呼ぶ。副重音は重音より弱く発音されるほか、持続時間も短い。副重音と主重音は絶対的ではなく、相対的な概念である。両者はペアになっている時、このうちのどちらが強いかは“就”の表す意味によって変わるかと主張する。「主重音」、「副重音」は必ずペアになって現れるが、単独で現れる重音もある。このような重音を「単重音」と呼ぶ。つまり、例 (28) の“一个面包”と例 (29) の“就”に両方とも重音が付加されるが、この二つの重音のレベルは必ずしも同じではないし、例 (28) の“就”と例 (29) の“一个面包”も同様である。

a.“就$_1$”の意味解釈と重音の関係

“就”は「範囲限定」の意味を表す場合、取り立てスコープは動詞の前か後かによって、重音の置き方が異なってくる。取り立てスコープが動詞の前に位置する要素の場合、取り立てスコープは“就$_1$”の直後に現れ、そこに副重音が付加されてもよいし、付加されず「弱化」[3] する場合もある。以下の例を参照されたい。

(30) A：谁没来？
　　誰が来ていないの？
　　B：就$_{主重音}$中国留学生们$_{副重音}$没来。
　　中国人留学生達だけ来ていない。

(31)　就$_{単重音}$中国留学生们没来，其他人都到齐了，我们开始吧。
　　中国人留学生達だけ来ていない。他の人はみんな来たから始めましょう。

上記用例 (30) では、“就”に必ず重音が付加される。取り立てスコープに副重音が付加されるかどうかは実際の会話の中での重要度で判断される。誰が来ていないのかという質問に対しては、「中国人留学生達」は重要な情報であるため、“中国留学生们”に副重音が付加される。一方、例 (31) では、話し手は“中国留学生们”という情報が重要ではないと判断する場合、“中国留学生们”に副重音が付加されず、「弱化」すると考えられる。

“就$_1$”は述語を取り立てる場合、“就$_1$”に必ず主重音が付加されるが、取り立てスコープに副重音が付加されなくても良い。例えば：

(32) a 我们就$_{主重音}$会说$_{副重音}$汉语，不会写汉字。
　　私達は中国語を話せるだけで、漢字は書けない。

上記用例 (32a) では、「中国語の会話ができるだけで」という意味を強調する場合、“说”に副重音が付加される。

しかし、取り立てスコープが動詞の後の要素の場合、“就$_1$”に必ず主重音が付加され、取り立てスコープに副重音が付加される。主重音と副重音は必ずセットとなって現れる。以下の例文を参照されたい：

(33) 我们就主重音会说汉语副重音，不会说英语。
趙さんはフランス語を学んだことがあるだけだ。

上記用例 (33) では、目的語の“汉语”に副重音が置かれる。“就$_1$”はその後の動詞と目的語両方を取り立てることが可能である。実際の会話の中では、副重音が置かれる場所によって、取り立てスコープを確定することができる。

b.“就$_2$”の意味解釈と重音の関係

「少量強調」の“就$_2$”は後方スコープの場合、“就$_2$”とその後の取り立てスコープの両方に重音が付加されるが、前方スコープの場合、取り立てスコープに重音が置かれ、“就$_2$”に重音が置かれない。以下の例を参照されたい。

(34) a 他十五岁单重音就参加革命了。 「前方スコープ」
彼は十五歳でもう革命に加わった。 香坂 (1997),pp.428
b 我就副重音有一本主重音，你别拿走了。 「後方スコープ」
私は1冊しか持っていないから，持って行かないでくれ。 呂叔湘 (2003),pp.212

上記用例 (34a) では、「少量強調」の“就$_2$”は「範囲限定」の“就$_1$”と異なり、その前の要素“十五岁”も取り立てることができる。取り立てスコープに重音が必ず付加される。“就$_2$”だけに重音が付加されるため、「単重音」である。“就$_2$”は軽く読まれる。つまり、弱化する。(34b) では、“就$_2$”はその後の要素を取り立てる場合、数が少ないことを強調するため、取り立てスコープに重音が置かれる。“就$_2$”に重音が置かれていないという見解もあるが、筆者の観察では、“就$_2$”には重音が付加されている。“就$_2$”の重音はスコープの重音より強く読まれる場合は不自然であるため本稿の用語法ではそれぞれ副重音、主重音ということになる。

コンテキストが不明な場合、語順だけでは、「少量強調」の“就$_2$”はどの要素を取り立てているのかを確定することはできない。実際の会話の中で、重音の置き方がこのような文の同音の意味解釈に重要な役割を果たしている。以下の例を参照されたい。

(35) a. 人家一个人就副重音挑一百二十斤主重音。 「後方スコープ」
あの人は一人で百二十斤しか担いで運ばなかった。
b. 咱俩才挑一百斤，人家一个人单重音就挑一百二十斤。 「前方スコープ」
我々二人でやっと百斤をかついで運べるだけなのに、あの人は一人で百二十斤もかついで運ぶ。 呂叔湘 (2003),pp.212

“就$_2$”は「少量強調」の意味を表す場合、重音が数量詞に付加されやすい。以下の例を参照されたい。

(36) a. 就主重音他们副重音几个人会唱这个歌。

彼ら数人だけがこの歌が歌える：他の人達ではない。

b. 就副重音他们几个人主重音会唱这个歌。

彼ら数人だけがこの歌が歌える：人数が少ない。 香坂（1997),pp.428

(37) a. 他们就主重音这一个儿子副重音。

あの夫婦にはこの息子が一人だけです：他の子供がない

b. 他们就副重音这一个主重音儿子。

あの夫婦にはこの息子が一人だけです：子供の数が少ない。 香坂（1997),pp.428

上記用例 (36a) は、「他の人達ではなく、彼らはこの歌が歌える」という意味を表しており、副重音は“几个人”ではなく、“他们”に付加される。一方、例 (36b) のように、“就$_2$”が「少量強調」の意味を表す場合、数量詞“几个人”に主重音が置かれる。例 (37) が示すように、目的語が取り立てスコープになる場合も同様である。

3.「重音」、「弱化」と「韻律フレーズ」

前述したように、重音は“就”の意味解釈と緊密な関係を有している。しかし、重音が付加されていない部分に特徴的な音声がある。本稿ではどの部分が弱いか、ということも“就”を含む文の意味に重要な役割を果たしていると主張する。その際、「取り立てスコープ」、「弱化」及び「韻律フレーズ」という概念を導入し、意味解釈の仕組みを分析する。

3-1.「弱化」とは

重音を含む重音句の後ろの部分は正常の発音より短くかつ弱く発音される。重音と副重音は弱化に対する影響は同じであるため、重音句は重音と副重音を区別しないことにする。以下の例を参照されたい。重音、弱化がそれぞれ影響する単位に下線、波線を引く。

(38) a. 你们两个小组一共才十个人，

我们一个小组単重音就十个人弱化句。 「前方スコープ」

君達は二つのグループを合わせてやっと十人だが、僕達のグループは一つで十人だ。

b. 你们一个小组有五十个人，

我们一个小组就副重音十个人主重音。 「後方スコープ」

君達のグループは五十人もいるのに、私達のグループはただ十人しかいなかった。

上記用例 (38a) において、重音がなければ、“就十个人”において、軽声字以外の字に語アクセントがあり、目的語の“十个人”に「語法重音」が置かれる。スコープに重音が付加されることにより、語アクセントと「語法重音」がなくなるため、通常の発音より短くかつ弱く発音される。本稿はこれを「弱化」と呼ぶ。（弱化が付加される意味的な単位を「弱化句」と呼ぶ。）例 (38a) においては、“就”の後にポーズがなければ、重音より右側に位置する文の最後まで続く要素に弱化が置かれる。一方、弱化は重音より左側の要素に影響しない。例 (38b) が示すように、重音が付加される“就”の前の“一个小组”は通常通りの発音で、弱化しない。このように、弱化は重音の位置に緊密的に関わり、“就”を含む文の意味解釈に重要な役割を果てしている。

3-2. 「韻律フレーズ」とは

弱化は、重音を含む重音句の後ろの部分に、単語を単位として加えられる。重音句とこれに続く弱化句が構成する単位は内部にはポーズを置くことはできず、ある種の句をなしていると考えられる。これを「韻律フレーズ」と呼ぶ。韻律フレーズの境界にはポーズを置くことができることが普通であるが、弱化句が後続しない重音句が連続する場合のように、境界にポーズが置かれない場合もある。本稿は{ }という符号を用い、連続した韻律フレーズの境界区域を示し、‖はポーズを入れるべき場所を示す。

a.「前方スコープ」

「前方スコープ」の場合、スコープに重音が置かれ、その後に続く“就”は必ず弱化する。韻律フレーズは重音句から始まり、弱化句で終わる一つのまとまりである。もし、“就”の後の要素も弱化すれば、“就”の後にポーズが入ってはいけない。以下の例を参照されたい：

(39) a. {老周 単重音 就讲了两个小时 弱化句}，别人都没时间谈了。
周さんだけで二時間話したので、他の人は話す時間がなくなってしまった。

b. {老周 単重音 就 弱化}讲了两个小时，别人都没时间谈了。
周さんだけで二時間話したので、他の人は話す時間がなくなってしまった。

c. {老周 単重音 就 弱化}讲了‖两个小时 単重音，别人都没时间谈了。
周さんだけで二時間も話したので、他の人は話す時間がなくなってしまった。

*d. 老周 単重音‖就讲了两个小时，别人都没时间谈了。 呂叔湘 (2003),pp.212

上記用例 (39a) が示すように、“就”とその後の要素“讲了两个小时”がともに弱化する際、“就”の後にポーズが入ってはいけない。しかし、例 (39b) が示すように、“就”の後に韻律フレーズの境界が置かれれば、この位置でポーズを置くことができる。ポーズの後は弱化せず、語アクセントをもつ語が現れる。さらに、“就”の右側の数量詞が強調される場合は、数量詞に弱化ではなく、重音が付加される。例えば、例 (39c) では、「二時間も」という数量の多さを強調しており、“两个小时”に重音を付加することができる。この場合、“两个小时”の前にポーズを入れる。重音が二つあるが、ポーズがいれられており、ポーズの前後では主重音と副重音のような相対差が意味をもたないためともに単重音とみなす。

また、例 (39d) から分かるように、“就”の後のポーズは容認できるが、“就”の前にポーズを入れることが許さない。

「前方スコープ」の場合、“就”は必ず弱化するが、“就”の右側まで弱化するかどうかは、スコープより右側の要素が新情報であるかどうかが関係する。以下の例を参照されたい：

(40) a. 你们八个人喝了五瓶啤酒，我们{三个人 単重音 就 弱化句}‖喝了八瓶啤酒。
君達は八人で五本のビールを飲んだ。私達は三人だけでビールを八本も飲んだ。

b. 你们八个人喝了八瓶啤酒，我们{三个人 単重音 就喝了八瓶啤酒 弱化句}。
君達は八人で八本のビールを飲んだ。私達は三人だけでビールを八本飲んだ。

上記用例 (40b) では、“就”の後の要素“喝了八瓶啤酒”が新情報の場合、“就”の後の新情報に弱化が付加されないことが多い。“就”と新情報の間にポーズを置いてもよい。一方、例 (40b) では、

“就”の後の要素“喝了八瓶啤酒”が旧情報の場合、または重要度が低いと話し手が判断する場合、弱化が“就”から“八瓶啤酒”まで続く。

重音句の中のどの部分に重音が置かれるかにより、スコープが変わり、それに伴って文の意味も変わる。例えば：

(41) a. {一句话 単重音就够了 弱化句}。
（沢山話さなくても、）一言だけで十分だ。
b. {一句话 単重音就够了 弱化句}
（何もしなくていい、）一言だけで十分だ。

重音句の中にあるすべての音節が強く読まれるわけではない。例 (41a) では、重音が数詞“一”に付加され、「沢山話さなくても」という意味に解釈される。一方、重音を“话”に置くこともでき、この場合、例 (41b) のように「他に何もせず、話だけでいい」という意味合いになる。

“就”の後にポーズを置くことができるが、実際の発話においては、上記用例 (41) で分かるように、“就”の後の要素“够了”は短いため、“就”の後にポーズをいれず、文の最後まで弱化する。

b.「後方スコープ」

「後方スコープ」の場合、二つの重音句＋弱化句の韻律フレーズがある。“就”に重音が置かれ、その後に動詞があれば、動詞が弱化し、“就”と一つの韻律フレーズになる。スコープにも重音が置かれ、その後続部分が弱化し、一つの韻律フレーズになる。例えば：

(42) a. 我一个人 {就 副重音喝了 弱化句} {一瓶 主重音酒 弱化句}。
私一人で一本のお酒しか飲まなかった。
*b. {我一个人就 副重音} ‖ 喝了一瓶酒 主重音。

上記用例 (42a) では、動詞“喝了”と目的語“一瓶酒”の間にポーズをいれても良いため、“就”とスコープが一つの韻律フレーズには入っていない。例 (42b) で分かるように、“就”は意味的にその後のスコープに繋がるため、“就”とその前の要素“我一个人”と一つの韻律フレーズにならず、“就”の後にはポーズが入らない。また、例 (42a) では、“一瓶酒”が省略できないため、「後方スコープ」の場合、二つの韻律フレーズが存在すると言える。

スコープ自体は省略できないが、“就”の後のスコープの中にない動詞が省略される場合がある。弱化句が後続しない重音句が連続することがある。例えば：

(43) 老两口 {就 主重音} {一个儿子 副重音}。
老夫婦には息子１人いるだけだ。 呂叔湘 (2003),pp.212

上記用例 (43) では、“就”の後に動詞が省略されているため、弱化句が後続しない二つの重音句が連続して現れる。この場合、韻律フレーズの境界にポーズが置かれない。

一つの文に二つの動詞フレーズが現れる「連動文」では、“就”とスコープの位置の関係が連動文以外と異なっている。以下の例を参照されたい：

(44) 小李去两个学校做了二十份问卷调查。
李さんは二つの学校に行って、二十件のアンケート調査をした。
a. 小王 {就 副重音去 弱化} {一个 主重音学校 弱化句} {做了五份 主重音问卷调查 弱化句}。

王さんはたった一つの学校でたった五件のアンケート調査をした。

b. 小王{就副重音去弱化}{一个主重音学校弱化句}‖{做了三百份単重音问卷调查弱化句}。

王さんは一つの学校だけに行って、三百件ものアンケート調査をした。

上記用例(44)を「前提文」とする。(44a)、(44b)は、異なる意味解釈と異なる「後方スコープ」をもつ。“就”はその後の二つの数量詞を同時に取り立てることもできるし、その直後の数量詞だけを取り立てることもできる。“就”の直後の数量詞だけがスコープの場合、二つ目の動詞の前にポーズを入れる必要がある。例えば(44b)の重音が付加された“三百份”が“就”のスコープと解釈されるのは、直前の韻律フレーズとの間にポーズが認められるからである。

*c. 小王{就副重音去弱化}{三十个学校}{做了一份主重音问卷调查弱化句}。

王さんは三十の学校に行って、たった一件のアンケート調査をした。

d. 小王去三十个学校{就副重音做了弱化句}{一份主重音问卷调查弱化句}。

王さんは三十の学校に行って、一件のアンケート調査しやらなかった。

二つの韻律フレーズが間にポーズなしで並ぶことがある。しかし例(44c)では、二つの韻律フレーズが並ぶが、その間にポーズを置くことができない。つまり、“就”は離れた数量詞を取り立てることができない。二つ目の数量詞である“一份”を取り立てる場合、例(44d)のように、“就”を後の動詞の直前に持ってくる必要がある。例(44d)では、“就”の前にも数量詞があるが、“就”はその後の数量詞“一份”しか取り立てられない。“就”の前の数量詞が“两个”より少ない数字であれば、「前方スコープ」も可能である。例えば:

e. 小王去了{一个学校単重音就弱化}做了三十份问卷调查。

王さんは一つの学校だけに行って、三十件のアンケート調査をした。

“就”の前後ともに数量詞が存在している場合。取り立てスコープに重音が付加されるが、重音の位置は必ず取り立てスコープとは限らない。取り立てスコープ以外の要素に、重音を付加することもできる。

(45) a. 你们八个人喝了八瓶啤酒,{我们三个人単重音就弱化}喝了八瓶啤酒。

君達八人で八本のビールを飲んだ。私達三人だけでビールを八本飲んだ。

b. 你们八个人喝了五瓶啤酒,{我们三个人単重音就弱化}喝了八瓶単重音啤酒。

君達八人で八本のビールを飲んだ。私達三人だけでビールを八本も飲んだ。

例(45a)はビールを飲む人の人数が予想より少ないことを強調している。話者は八本のビールという量は三人以上例えば、八人が通常だと思っているが、実際のビールを飲む人は三人で、予想より少ない。

一方、(45b)はビールを飲む人の人数が少ないことに加え、ビールを飲んだ量も多いということが表現されている。「前方スコープ」の場合、“就”には重音が付加されず、“就”の前の取り立てスコープに重音が付加される。取り立てスコープ以外の要素に重音を付加することもできる。また、“就”はその前の取り立てスコープとともに一つのフレーズをなす。

(46) a. 你们三个人喝了十杯啤酒,

我们三个人{就副重音喝了弱化}{三杯主重音啤酒弱化}。

君達三人で十杯のビールを飲んだが、私達三人でビールを三杯しか飲まなかった。

b. 你一个人喝了十杯啤酒，
我们三个人 単重音 ‖ {就 副重音 喝了 弱化}{三杯 主重音 啤酒 弱化}。
君一人で十杯のビールを飲んだが、私達三人でビールを三杯しか飲まなかった。

上記用例（46a）、（46b）が示すように、「後方スコープ」の場合、“就”と取り立てスコープ両方ともに重音が付加される。例（46b）で分かるように、取り立てスコープ以外の要素に重音を付加することもできる。また、“就”はその後の取り立てスコープとともに一つのフレーズをなす。

（47）a. 你们八个人喝了八杯啤酒，{我们三个人 単重音 就喝了 弱化句} ‖ 八瓶 単重音 啤酒。
你们八个人喝了八杯啤酒，{我们三个人 単重音 就 弱化} 喝了 ‖ 八瓶 単重音 啤酒。
私達八人で八杯のビールしか飲まなかったが、君達三人だけでビールを八本も飲んだ。

b. 你们八个人喝了八杯茶，{我们三个人 単重音 就 弱化} 喝了八杯啤酒 単重音。
私達八人で八杯のお茶しか飲まなかったが、君達三人だけで八本のビールを飲んだ。

4. 終わりに

本稿では範囲副詞の“就”は「範囲限定」、「少量強調」の二つのパターンに分けられると提案し、“就”の意味解釈と重音の関係を分析した。「範囲限定」の“就”は「後方スコープ」しか容認できないのに対して、「少量強調」の“就”は「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方が可能である。

“就”の表す意味によって、重音の種類と置き方が異なってくることが分かった。“就”のこの二つの意味を区別するには、重音のレベルを見直す必要がある。「少量強調」の“就”は「前方スコープ」の場合、“就”に先行するスコープに重音が付加され、“就”の後にポーズがなければ、“就”から文の最後までは弱化する。「後方スコープ」の場合、“就”とスコープの両方ともに重音が置かれ、二つの重音が必ずセットとして現れる。この二つの重音には相対的な差があり、これらを主重音、副重音として本稿では区別した。副重音は主重音より、やや弱く発音される。この用語を使えば「後方スコープ」の場合、“就”に副重音、スコープに主重音が置かれると記述することが可能になる。

“就”が「範囲限定」の意味を表す場合、“就”とスコープの両方に重音が付加される。“就”に主重音、スコープに副重音が置かれている。

また、本稿は“就”を含む両義的な文（岐義文）では、重音だけではなく、弱化もその意味解釈に重要な役割を果たしていることを示した。“就”に弱化が付加されれば、前方スコープである。また弱化句は必ず重音句の後に現れ、両者が一つの韻律フレーズをなす。以上のパターンは“就”を含む文の意味解釈に重要である。

前方スコープの場合、“就”の右側まで弱化するかどうかは、スコープより右側の要素が新情報であるかどうか、単語の長さ、数量詞が強調されるかどうかなどが関係する。一方、後方スコープの場合、“就”とスコープの両方に「重音」が置かれ、二つの韻律フレーズが並ぶと考える。

本稿の第三章は2012年日本中国語学会全国大会で口頭発表したものに加筆したものである。本稿の中国語引用文の日本語訳は筆者による。

参考文献

〈日文〉

郭春貴　2001『誤用から学ぶ中国語』　白帝社。

郭春貴　1994『日本人のための中国語発音特訓』　白帝社。

香坂順一　1986『現代中国語辞典』　光生館。

香坂順一　1988『初心者も使える中国語虚詞辞典』　光世館。

佐治圭三　1991『日本語の文法の研究』　ひつじ書房。

重松淳　2007「中国語イントネーション研究の現状」音声研究 第11巻第2号　5～15

つくば言語文化フォーラム編　1995『「も」の言語学』　ひつじ書房。

寺村秀夫　1991『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』　くろしお出版。

湯延池　1987『中国語変形文法研究』　白帝社。

沼田善子　1986「第2章　とりたて詞」奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』　凡人社。

沼田善子・徐建敏　1995「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』　くろしお出版。

馮蘊泽　2007『中国語の音声』　白帝社。

茂木俊伸　1993「とりたて詞「まで」「さえ」について――否定との関わりから」筑波大学国語国文学会。

楊立明　2002「中国語の文ストレス（重音）の音声的特徴」　早稲田大学語学教育研究所紀要　第57号。

楊立明　2003「中国語「岐義文」の意味判定における文ストレスの役割」　早稲田大学語学教育研究所紀要　第58号。

吕叔湘主編　牛島德次・菱沼 透監訳　2003『中国語文法用例辞典　現代汉语八百词日本語版』 東方書店。

李臨定著 宮田一郎譯　1996『中國語文法概論』 光生館。

劉月華・潘文娱・故韋華著、相原茂監訳　1988『現代中国語文法総覧　上』　くろしお出版。

劉月華・潘文娱・故韋華著、相原茂監訳　1991『現代中国語文法総覧　下』　くろしお出版。

〈中文〉

白梅丽　1987「现代汉语中“就”和“才”的语义分析」『中国语文』 第5期。

陈雅　2003「试析副词“就”的语音形式及语义指向」『南京社会科学』 南京社会科学杂志编辑部。

陈立民　2005「也说“就”和“才”」「当代语言学』 第7卷年第1期 16-34页。

陈小荷　1994「主观量问题初探—兼谈副词“就”、“才”、“都”」『世界汉语教学』第4期。

端木三　1999「重音理论和汉语的词长选择」『中国语文』第4期 中国语文编辑部。

邓根芹・李秀云　2006「限定副词“就”的句法、语义分析」常熟理工学院学报。

方梅　1995「汉语对比焦点的句法表现手段」『中国语文』247页　中国社会科学出版社。

哈杜默德・布斯曼著 陈慧瑛编译　2003『语言学词典』商务印书馆。

侯学超　1998『现代汉语虚词词典』北京大学出版社。

吕叔湘　1980『现代汉语八百词』商务印书馆。

孟凡铃　2008「副词“才”、“都”、“就”的主观量研究」辽宁师范大学。

宋欣桥　2004「普通话语音训练教程」　商务印书馆。

史金生　1993「时间副词“就、再、才”的语义语法分析」『逻辑与语言学习』第3期。

徐世荣　1980『普通话语音知识』文字改革出版社。

徐以中・杨亦鸣　2010「“就”与“才”的穿义及相关语音问题研究」『语言研究』语言研究杂志

编辑部。

英語文献

Yuen Ren Chao 1968『A Grammer of Spoken Chinese』 株式会社ゆまに書房。

Chih-hsiang Shu 2011「Sentence Adverbs in the Kingdom of Agree」 Stony Brook University

---

1 本稿は『现代汉语八百词』の日本語版『中国語文法用例辞典』(2003) を参照している。

2 本稿は「羅輯重音」という概念を援用したい。この概念は楊立明 (2003) から取り入れたものである。中国語学界では、アクセントの「重音」と区別し、文ストレスのことを「句重音」と呼んでいる。さらに、「句重音」には「語法重音」と「羅輯重音」に区別される。「語法重音」の位置は統語構造によって自動的に決まるものであるのに対し、「羅輯重音」の位置はフォーカスの位置に関係する。

3 「弱化」とは普通の発音より軽くかつ短く発音されること。詳細については本稿 P.15 で参照されたい。

4 “就”の後にポーズがなければ、文の最後までは弱化する。

Prosody and Meaning in Chinese Focus Adverb "JIU"

Li Zhili

Abstract:

This paper reviews the meanings of Chinese adverb JIU in terms of its prosodic properties. JIU as a focusing adverb specifies its scope of focus as a stressed phrase, which is characterized by a weakening after the logically stressed words. JIU itself may or may not be stressed. When it is stressed, it is immediately followed by the stressed focus phrase without an intervening pause. Which of the pair of the stressed phrases has the primary stress distinguish two shades of the focus meaning, which are termed as "eliminative focus" and "emphasis of paucity". When JIU follows the focus, it is always weakened within the stressed phrase and its focus is on the paucity.